

ジェーン・エアの感情生活

宮崎孝一

小説とは元来、「ニュース速報」や「体験談」に対する人間の興味と、「おもしろい話」「変わった話」を聞きたいという人々の好みとに依りて生まれたものであった。イギリス小説に関してもこのことは、はっきり言える。デフォー(Daniel Defoe)が、その創作の多くに、「実話」の仮面をかぶせて発表したことは、当時の読者の要求に対する彼の洞察力の敏感さを物語るものであろう。「ロビンソン・クルーソー」(Robinson Crusoe)のごときも、遠い島で数奇な経験をした船乗りの「おもしろい話」であると共に、また「実話」として読者の多くには受け取られたのであった。小説が一つのジャンルとして確立し、読者が小説を読む訓練を経るにつれ、「実話」的興味は次第に下火になったが、一方の「おもしろい話」という要素は、小説にとって、より本質的なものとして残った。ところで、ナイーヴな読者に最も強く訴えるのは、ストーリーの外面的なおもしろさ、すなわち、場面の転換の目まぐるしさとか、人物の言動の魅力などであらう。そのような小説においては、元来精神内のできごとであるはず

の恋愛を扱う場合でさえ、個人の情緒の深みをさぐるよりも、むしろ、他の人物たちや、社会の因襲、習慣などとの関連において、外面的事件を押し進めるための道具として用いられることが多い。「トム・ジョーンズ」(Tom Jones)におけるトムとソファイア(Sophia)との恋愛などはその典型的なものである。十九世紀初頭のジェーン・オーステン(Jane Austen)に至ってさえ、この態度を脱却してはいない。さて、大まかな言い方を許してもらえらば、小説「ジェーン・エア」(Jane Eyre, 1847)は、人間の精神の内奥に鋭い光をあてたという点で、それまでのイギリス小説から大きく前進した作品であった。これはすでに、キャスリーン・ティロツン(Kathleen Tilson)その他の評家が指摘しているところである。(一)この小論の目的は、人間精神への照明がどのようにあてられているかを、作品の中から具体的にさぐり、考察することである。

「ジェーン・エア」を読んで気づくことの一つは、その女主人公の率直さということである。これは、ジェーンが、在来の小説の女主人公たちのような美女でないことと共に、彼女の大きな特徴である。率直さとは、コンヴェンションに煩わされず、自分の考えに忠実であることから生ずるものである。それはまた、作者シャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë) が、従来の小説の女主人公たちのコンヴェンショナルな型から絶縁したことをも示している。在来の小説の女主人公は、何よりもまず美しく、しとやかでなくてはならなかった。例えば、フィールドイング (Henry Fielding) の「アミーリア」 (Amelia) の女主人公は、長らくつき合っていたブース大尉 (Captain Booth) から正式に求婚されたとき、一言も答えず、たちどころに卒倒するほど、かよわく、おとなしい女性として描かれていた。これに反し、ジェーンは、いかなる場合にもはつきりと自分の気持ちを述べる強さを持っている。そしてこの率直さの故に、幼女時代のジェーンは周囲のおとなたちから誤解され、憎まれ、成人してからはロチェスター (Rochester) に愛されることになる。叔母のリード夫人 (Mrs. Reed) から、お前はうそつきだと言われたとき、ジェーンは次のように言う。

「私はうそつきじゃありません。もしうそつきなら、叔母さまを好きだと言うでしょう。でも私は叔母さまをきらいだと、はっきり言います。世界中で、ジョン・リードをのぞいたら、叔母さまが一番きらいです」 (四章)

また、牧師のブロッケルハースト (Brocklehurst) との間には、次のようなやりとりがある。

「…悪い子は死んでからどこへ行くか知っているかね」

「地獄へ行きます」…

「地獄とはどんな所か、説明できるかね」

「火が一面に燃えている穴です」

「それで、その穴に落ちて、永久に焼かれていたいと思うかね」

「いいえ」

「それなら、どうせねばならんかね」

「私はちよつと考えた。出て来た返事は相手の気に入りそうなものではなかった。「体を丈夫にして、死なないようにしなければなりません」 (四章)

学業を終えたジェーンが、家庭教師としてソーンフィールド館 (Thornfield Hall) に住みこんでから、その主人ロチェスターに、「私をハンサムだと思いますか」と尋ねられたとき、彼女は「いいえ」と答える。彼女は言っている。

もし私が慎重であつたら、ありきたりの、あいまいな、さしきわりのないことを述べて、この問いに答えたことだろう。ところがあの返事は、あつと言う間に、つい口からすべり出てしまったのだ。 (十四章)

このときまで数多くの情婦を持ち、真実のないお世辞を言われるのに馴れていたロチェスターには、このような受け答え

は全く予期しなかったところであり、強い印象を受けることになった。

ジェーンはロチェスターに向かつて次のように言う。

「あなたさまが、単に私より年上だからとか、私よりも広い世間をごらんになったとかいいう理由だけで、私に命令なさる権利がおありだとは私は思いません。自分の方がすぐれていると主張できるかどうかは、与えられた時間と経験をどう用いたかによって決まるのです」(第四章)

ジェーンは、率直であるが故に、物事の不合理さに対して敏感である。彼女は、叔母の家を出てから送られたローウッド (Lowood) の学校の食事の粗末さについて次のように感じる。

空腹で、もう気が遠くなりそうだった私は、味のことなど考えもしないで、自分に当てがわれた食事を一さじ、二さじ、がつがつと食べたが、しかし、空腹感がひとまずにぶると、私の持っているのが、胸のむかつくような食物であることがわかった。こげたおかゆは、腐ったじゃがいもと変わらぬくらいまずくて、餓死しそうな人間でもたちまち気分が悪くなるようなものだった。：朝食が終わり、しかも、朝食を食べた者はひとりもいなかった。食べもしなかった食物に、感謝の祈りがささげられ、二度めの賛美歌がうたわれた。

(傍点筆者) (第五章)

ジェーンは外界に対して率直であるのみならず、自分の心をも率直に見つめ、たとえそれが不完全なものであっても、目をそらそうとはしない。少女時代のジェーンに同情した薬剤師ロイド (Loid) から、彼女の父方の貧しい親戚が見つければ、そこへ行って住む気はないかと尋ねられたとき、

「いいえ、貧乏な人たちといっしょにくらすのはいやだわ」と私は答えた。

「たとえその人たちがあなたに親切でも?」

私は、かぶりを振った。なんで、貧乏人が親切にできるのか、私にはわからなかった。彼らの話しぶりに染まり、態度をまね、教育も受けられず、ときたまゲーツヘッド (Gateshead) の村の小屋の入り口で子供をあやしたり、せんとくしたりしているのを見うける貧しい女たちのようになるなんて。いやだ。身分を落としてまで自由を求めるほど私は勇敢ではなかった。(三章)

ロチェスターに秘密の妻があることを知ってソーンフィールドを飛び出したジェーンは、いとこたちに助けられて、村の小学校で子供たちを教えるようになった最初の日の夕方、次のような感想をいだく。

今日の午前と午後、あのがらんとした、粗末な教室ですごした数時間のあいだ、私は非常に楽しく、心おだやかに、満足を感じていたろうか。自分を偽らずに、私は答えなければならぬ。——いや、私はずいぶんわびしい感じがしたと。私は——そう、愚かな私は——品位を

落としたと感じたのだ。私は社会生活の階段で、自分を高めるかわりに、低める一步を踏み出したのではあるまいかと思った。自分の周囲に聞き、見たすべてのものの無知と窮乏と下品さとに、心弱くも失望させられたのである。(三十一章)

自分の心を直視するジェーンは、田園の牧歌的生活を表面的に賛美してお茶をにごそうとはしない。

二

ジェーンの率直さの根本にあるものは、理性よりもむしろ感情である。彼女はほとんど自分の感情だけを頼りに生きており、一たび感情が変化すると、彼女という人間、および彼女を囲む全世界が変化したと感ずる。少女時代、叔母の子供に反抗した罰として赤い部屋(the red room)に閉じこめられ、恐怖を味わって後しばらくは、何事にも興味が持てなくなる。

…ベッシー(Bessie)は私に本が欲しいのかと尋ねた。本ということばは、ちょっと私の心をそそった。私は「ガリヴァー旅行記」を書斎から持って来てくれるようにと頼んだ。この本は、なんども楽しみながら読みかえた本だった。私はこの物語を、本当にあったことだと思つて、おとぎ話よりもずっとおもしろいと思つていた。…しかも、いまその大好きな本が手の中に置かれてみると、——ページをめくって、いままでいつも感じた

魅力を、すばらしいさし絵の中にさがし求めたとき、すべては、うす気味わるく、ぞつとするような感じであつた。巨人は、やせこけた悪鬼に、小人は、意地わるの恐ろしい小鬼に、ガリヴァーは、世にも恐ろしい危険な地域をさまよう孤独な放浪者に見えた。(三章)

成人後のジェーンは、ロチェスターを愛するようになるにつれ、彼の一見魁偉な容貌に魅力を感じはじめたが、また、自分自身の容貌に関してさえ、彼女は、その時々気分によつて全く違った判断をする。自分を愛してくれていると思つていたロチェスターが、実はブランシュ・イングラム(Blanche Ingram)を愛しているのだと感じたとき、ジェーンは次のように自問自答する。

私は自分に向かつて言つた。「お前がロチェスターさまのお気に入りだつて? あの方を喜ばすような力を授かつているつて? 何らかの意味であの方にとつて大切なものだつて? 行つてしまえ。お前のばかきかげんには胸が悪くなる。…あわれな、まぬけのむく鳥め! …このめくらの犬ころめ! そのただれたまぶたを開いて、自分の呪われた非常識さを見るがいい。結婚する意志などあるはずのない目上の人から、お世辞を言われるなんて、女にとって何の益もありはしないのだ。…あすになつたら、おまえの前に鏡をすえ、チョークでもつて、おまえの肖像画を、忠実に、どんな欠点もごまかさずに、どんな目ざわりな輪廓も省略せず、どんな不

快なゆがみも直そうとしないで描いてみるがいい。そしてその下に、「身よりのない、貧しい、ぶきりような女家庭教師の像」と書くのだ。(十六章)

ところがその後、ロチェスターの本当の気持がわかり、彼と愛のことはかわした翌朝にはジェーンは次のように感じる。

髪をとかしながら、鏡の中の自分の顔を見て、私ほもはや、それを醜いとは感じなかった。表情には希望の色があり、顔色は、いきいきとしていて、目は成就の泉を眺めて、そのきらめくさざなみから輝きを借りてきたかのようにであった。これまで私は主人の顔を目を向けるのが心配なことがよくあった。私のまなざしが主人に不快の念を与えはしないかと恐れたからである。けれども今は、主人に向かって顔をあげても、その表情が彼の愛情をさますことはあるまいと思えた。(二十四章)

三

このようにジェーンの感情の中心にあつて、彼女を全面的にゆきぶり、幸福にもし、不幸にもするものは、愛を求める心であり、愛の対象へのあこがれである。叔母の家と、学校において彼女が経験した不幸の根本は、それが与えられないということであった。少女時代の彼女については次のように語られている。

私はいつも寝床にはいるときは人形といっしょだっ

た。人間は、何かしら愛さなければいけない。愛情を注ぐのにそれ以上値うちのあるものがなかったので、私はちっぽけな、かかしのようのみすばらしい、色あせた人形を愛しいつくしむことに喜びを見いだそうと苦心した。：人形が安らかに温かそうに寝ていると、人形もうれしいのだと思つて、私はいくらか幸福だった。(四章)

また、学校で友だちになつたヘレン・バーンズ(Helen Burns)に向かつては、次のように言つてゐる。

「：もし、ほかの人が私を愛してくれないのなら、私は死んだほうがましよ——ひとりぼっちで、みんなにきられてゐるのは、がまんできないの。ねえ、ヘレン、私、あなたか、テンプル先生か、ほかのだけれども、私のほんとに好きな人の真実の愛情を得るためだったら、自分の腕の骨を折られても、喜んでがまんするわ。」(八章)

小説「ジェーン・エア」の、ジェーンの少女時代に関する記述は、成人後のジェーンの生活に無関係な蛇足であるという説もあるが、幼いジェーンが、ひとを愛したい、また、愛されたいと強く望みながら、それがほとんどかなえられなかったことを語ることは、ひとたびロチェスターとめぐり会つた後のジェーンの恋心が激しく燃えあがるための準備として是非とも必要だったのである。

いったんロチェスターとの結婚をあきらめた後のジェーン

が、彼と結婚して伝道に従うことが神の意志だとしてシン・ジョン (St. John) に求婚され、心は動きながら、ついにそれをことわるのも、彼が彼女を人間として愛していず、また、彼女も彼に対して真の愛情が感じられないという理由によつてであつた。

…彼が与える、どのような愛の表現も、すべて主義のために払われる犠牲なのだという意識に耐えることが、私にできるだろうか。いや、そんな殉教は思つてもぞつとする。私は絶対にそんな苦難には耐えられない。(三十四章)

そして彼に対して次のように言う。

「私は愛についてのあなたの考え方を軽蔑します。私は、あなたが与えてくださるというまがいものの愛情を軽蔑します。そうですとも。あなたがそんな愛をくださるとおっしゃるなら、私はあなたを軽蔑します」(三十四章)

そしてジェーンは、「愛されるとはどんなことかを私は知つていた」とつけ加えている。

また、彼女から拒絶のことばを聞いたシン・ジョンが、相変わらず忍耐がよく、冷静であることに關して、「私は、その場になぐり倒されたほうが、いっそましたと思つた」と言っている。(三十四章)

このように万事に激しさを求める気持は、少女時代のジェーンにすでに見られた。寄宿学校にはいったばかりのころの、

風の吹き荒れる夕方、彼女は次のように感じる。

…私は不思議な興奮を覚え、向こう見ずな熱っぽい気持から、風がもつと荒々しく吠えたけり、うすやみが暗黒に深まり、騒々しさが叫喚に高まればよいのにと願つた。(六章)

四

今まで、ジェーンの情熱の激しさということに着目してきたが、その反面ジェーンには驚くべき冷静さがあり、ときには打算に近いような心の動きも見られる。そういう態度は、元来非常に激しいはずの、ロチェスターとの恋の折々において最も顕著に見られ、コントラストによつて立体的効果を与えている。ロチェスターが彼女のことを「天使」と呼んだとき、彼女は、自分は自分であつて、死ぬまで天使になるつもりなどないと笑いながら答える(三十四章)。また、ロチェスターの熱烈な恋の告白に対しても次のように言う。

「しばらくの間は、あなたは今のような気持でいらつしやるでしょう。——ほんのしばらくの間は。それから冷たくなるでしょう。次には気まぐれになるでしょう。その次にはとても気むずかしくなつて、あなたのごきげんを取るのに、ずいぶん、骨をおらなければならなくなるでしょう。…あなたの愛は、六か月、あるいは、もつと短い間で消えてしまふでしょう。夫の熱のさめない期間が最大そのくらいなものだと、もの本で読んだこと

「がございます」(二十四章)

このことばは、ロチェスターに向かつて言われたものであり、同時に、ジェーンが、急速にロチェスターに向かつて傾いていく自分の心を抑えようとして、自分自身に言い聞かせているものとも聞こえる。

また、ジェーンはロチェスターから彼の過去の情婦たちとの感傷の生活を聞かされたとき、次のように考える。

私は彼のことばから次の結論を引き出した。それは、もしも私が、自分を忘れ、これまで教えこまれてきたもろもろの教訓を忘れて、——何かの口実のもとに——もつともらしい名目をつけ——誘惑されて——それらの哀れな女たちの後つぎになるならば、彼がいま彼女たちの思い出を汚らわしいものと思っているのと同じ感情で、いつかはこの私をながめるに違いないということである。(二十七章)

ロチェスターに隠し妻があることがわかって、ジェーンとの正式な結婚ができないことになった後も、彼女はロチェスターに対する恋心を処理し切れずにいるが、しかし自分に次のように言い聞かせて、不義の關係に陥ることから身を守ろうとする。

「私は自分が大事だ。孤独であればあるほど、頼りになるひと、支えになってくれるひとがなければならぬ。まずまず私は自分を尊重しよう。神によって与えられ、人間によって認められた法律を守ろう。今のよう

なく、正気で、狂っていないなかったとき私が受け入れた道徳律を守ろう。法律や道徳は、誘惑のないときのためにあるのではない。今のように、肉体と魂が、法律や道徳のきびしさに反逆を起こしたときのためにあるのだ。法律や道徳はきびしいものなのだ。それは侵されてはならないのだ。自分一個の便宜のために、それを破っていないものなら、その価値はどこにあるう。：以前からいっていた意見や決心だけが、今のようなときに固く守るべき唯一のものなのだ」(二十七章)

ここではじめてジェーンは、自分の感性を信頼せず、外面的規範によって決断するという、彼女としては新しい身の処し方をしようとしている。

五

ジェーンの従姉のうち、一人は、男性から賞賛されることだけを頼りに生きる軽薄な女になり、他は、宗教にこり固まった冷たい女になったことを述べたとき、彼女は次のように言っている。

判断力に欠けた感情というものは、まったく水っぽい飲みものにすぎないが、しかしまた、感情によってやわらげられていない判断力とまでは、人間がのみ下すのに、あまりににがい、ひからびた食べものである。(二十一章)

ジェーン自身のこれまでの生き方は、判断力を欠いていた

とは言えないが、それよりもさらに強く感情に支配される場合の方が多かった。ところが今、ロチェスターとの恋によって感情が強くゆさぶられ、しかも、彼と結婚することは許されないという非常事態に臨んで、彼女はこれまでの何倍もの判断力を働かさなければならぬことになったのである。しかもなお、ジェーンが必死にしようとする判断力は、ともすれば感情によって押し流されようとする。ロチェスターと別れることが最上の道だと信じてソーンフィールドを出てから、何処へ行くというあてもなくさまよっているとき、ジェーンの心は干々に乱れる。

私は、あとに残してきたひとのことを苦しみもだえつつ思った。：私は彼のものになりたかった。私は引き返したくて、せつなかつた。：私は、もどつて行つて、彼をなぐさめることができる——彼の誇りとなり、彼を不幸から救い出し、破滅から助け出すこともできるのだ。：小鳥が茂みや雑木のなかで鳴きはじめた。小鳥はその配偶者に忠実である。小鳥は愛の象徴である。私はなんだろう。胸の苦しみに耐え、道徳を守ろうと狂気の努力をしているさなかにも、私は私自身を憎んだ。自分を是認してみても、慰めは得られず、自分を尊敬してみてもえ無駄だった。私は主人を傷つけ——そこない——捨ててきたのだ。自分自身の目に、自分が嫌らしいものになつた。：ただひとり道を歩きながら、私は、はげしく泣いていた。(二十七章)

シン・ジョンの一家に助けられ、落ち着いてから数カ月たった後でさえ、ジェーンの感情は整頓されてはいない。自分のとつた行動を是認しようとするそばから、ロチェスターに對する恋心が湧いてくる。

ところで、一つの質問を自分に出してみよう——どちらがよいか——誘惑に屈服し、情熱のままになり、つらい努力は避け——苦しい戦いもせず——絹のわなに身を沈め、そのわなを被っている花の上で眠りこみ、南の国の快樂の別荘で贅美のなかに目ざめ、いま、ロチェスター氏の情婦としてフランスに住み、一日の半ばを彼の愛にうつつぬかしているのと——なぜなら、彼は、たぶん——おお、もちろん、しばらくは彼は十分私を愛してくれるであろうから。彼は私を愛してくれた——だれも二度とあれほど私を愛してくれることはない。二度と私は、美や青春や優雅さにささげられた、あのうっとりするような尊敬を経験することはあるまい——なぜなら、ほかのどんな人にも、私がそのような魅力を持っているとは見えないだろうから。あの方は、私に夢中で、私を誇りとしていた。あの方以外だれもそんな気持ちになつてはくれないだろう——でも、いったい私は、どこをさまよい、何を言っているのだろう。とりわけ、何を感じているのだろうか。どちらがよいかと私はきいているのだ。マルセーユの愚者の樂園に女どれいとなり——ごまかしの悦楽にしばし耽溺し——つきには悔恨と恥辱の

苦い苦い涙にむせび泣くのと——健全な英国中部地方の、そよ風の吹く山陰で、自由で貞淑な村の女教師として過ごすのと。：私は自分を幸福だと思い、まもなく自分が泣いていることに気がついて驚いた。(三十一章)

右のくだりは、「意識の流れ」の筆法にも似て、ジェーンの心がロチェスターを否定しようとして、かえって彼への思いに捉えられていくさまを巧みに写している。

六

自分の生活を、主として直感ないし感情に基づいて決定してきたジェーンが、ロチェスターとの関係を清算する場合においてのみ、外面的な道徳律や宗教的戒律によって決定しようとしたことは、彼女の本性にとって無理なことだったのだ。それだからこそ、はるか彼方から自分の名を呼ぶロチェスターの声を聞いたと感じたとき、彼女はためらうことなく彼の許へ戻って行く。彼と別れたときのジェーンの理論からすれば、今戻って行くこともまた許されなければずである。ロチェスターの狂った妻が死んだことを、このときのジェーンはまだ知らないのだから。ここにおいてジェーンの判断力は完全に感情に屈服したと言える。戻って行ったジェーンが、ロチェスターと幸福な結婚生活にはいるのは、作者のハッピー・エンディングへの好みによって決定されたまでのことで、そこまでのストーリーには、それを保障する何ものもありません。ジェーンのテレパシーへの感応という超自然

的な事がらを導入したことは、読者の反感を招くことなしに、理性に対する感情の勝利を確立させるための *deus ex machina* であった。

これ以外の場合においても、ジェーンの感情を誘発する契機になる事件や人物は、とかく便宜主義によってでっち上げられ、十分な必然性を与えられていない。例えば、ジェーンがソーンフィールド館のそばで、旅から戻ったロチェスターにはじめて会ったとき、彼はジェーンに自分の邸を指さして「あれはだれの家ですか」とか、「ロチェスター氏をご存じですか」とか、「彼はるすなのですか」とか尋ねる(十二章)。後に、この紳士がロチェスター自身だったのだと知ったときのジェーンの驚異の気持ちを強めるためには、これは効果的なくふうであったかも知れないが、まだジェーンに対してなんの関心も持っていないはずのロチェスターが、こんなミスファイケーションを故意に行なう動機は見当らない。また、ジェーンの嫉妬をかり立てようとしてイングラム嬢をさかんにほめそやし、愛しているふりをしているはずのロチェスターが、ときにイングラム嬢のことを評してジェーンに、「太くてたくましい女……大きくて、浅黒くて、肉づきがよくて、カルタゴの女たちが持っていたに違いないような髪の毛をした女……」(二十章)などと言うのも不思議である。こんなことを言ったのでは、せつかくのロチェスターの芝居がぶちこわしになってしまう。それはただ、ジェーンの気持ちをかき乱す効果を発揮するための作者の作為にすぎない

い。そのほか、ロチェスターの狂人の妻が、邸の中をさまよ
い歩いて殺人や放火を企てたりするのに、ロチェスターはそ
れを留める手段を強化しようとしもないのも、ジェーンの恐怖
感をつのらせるための作者の方便としか考えられない。ある
いはまた、ロチェスターと結婚する望みを失ったジェーン
が、ほとんど無一文で、何の当てもなくソーンフィールドを
離れ、餓死寸前に陥ることも、ジェーンの絶望の深さを示す
のには好都合であるが、今まであらゆる逆境に処してきた彼
女としてはやや不自然な感じがする。

ジェーンをめぐる人物たちに関しても、ロチェスターをは
じめとして、ブロックルハースト牧師も、イングラム母子
も、またシン・ジョンも、あまりにも人間離れのした芝居が

かった人物であるといえる。これらの点においては、作者は
まだ少女時代の空想の所産であったアングリア(Angria)の
世界のなごりや、ゴシック小説、またバイロンその他の浪漫
派詩人たちの影響を残している。

「ジェーン・エア」が、ジェーンの感情生活を真摯にたど
った作品でありながら、現代の読者に、ともすればあきたり
ない感じを与える理由の一つは、このようなプロットの御都
合主義と、ジェーン以外の人物たちの性格の非現実性にある
と考えられる。

〔註〕

(一) Kathleen Tilotson: *Novels of the Eighteen-forties*, pp.
260—261.